

学園ニュース

富山大学

No.29

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和54年3月15日

卒業生に贈る — 不可知なる未来へ寄せて —

人文学部長兼文理学部長 手崎政男

今この筆を執ろうとして、私が大学を卒業したころのことを、そしてその卒業謝恩会の折のことを、つい昨日のことにように思い起こす。謝恩会の会場は赤坂の山王ホテルで、その前年、二・二六事件の青年将校たちのたてこもった名残りが柱などの生々しいきずあとに見られたから、思えば、すでに40年余を経過したことになる。謝恩会に招じた藤村作先生、橋本進吉先生、久松潜一先生、池田亀鑑先生のいずれもがすでに他界されていて、すべて茫洋として夢のごとくであるが、その席で、「卒業論文が諸君の生涯の最大の業績ということにならないように願います」と言われた久松先生の言葉が私には忘れられない。私には始めから学究一本の道を歩むということは叶わなかったのだが、それでもこの言葉は常に私の座右の銘であった。幸い大学という恵まれた場を得てからもすでに20年を越える今にして、なおこの言葉が私の胸を刺す。「語りつぎ言ひつぎゆかむ」という万葉歌人の歌詞のごとく、本来私自身の自戒とすべきこの言葉を、今学窓を巣立とうとされる諸君に伝えておきたいと思う。

久松先生がこの言葉を話されたとき、私たちの間に思わず笑いに似た声が起こったことを覚えている。はずむような心で未来への夢をふくらませていた私たちに、卒論が終着駅であり得るはずがなかったからだ。しかし、われわれの前にたちはだかる“未来”というものは、実は容易ならざるものであることにしだいに私は気づくようになっていく。

“歴史はくりかえす”という言葉があるが、人生はくりかえしがきかない。“後悔先に立たず”とは、未

来に対する予知能力を人間はだれも持たないことへの風刺でもあろう。“未来”はもともと人間を越えたものであり、それは神のわざに属するものだと信じきっていた点では、古代人のほうが今のわれわれよりもむしろよくものが見えていたようだ。未来を「招く」ための言語行為が「禱る」という文学活動としてかつては存していたのだが、人間が神を離れるようになっていくにつれて、次第にその活動が弱くなるに至ることもその証の一つだろう。人間はさまざまな能力に恵まれてはいるが、未来に関する予知能力だけは、それがたとえ寸時の未来のことであっても、すべての人間を越えるものであることは否めない。“未来”は人間にとって全くの不可知なのだ。勿論、未来を知ろうとするさまざまな試みや営みがなされてきたし、これからもなお続けられるだろうが、未来を確実に予知し得る時が来るとしたら、その時の人間はもう人間であることをやめているであろう。人間の悲喜劇の多くは、未来が元来不可知であるということに由来するのであり、また、未来を非道に手にしようとするところから、人間が人間の道を踏みはずす事例は、われわれの身邊にとどまることなく継起している。われわれは、しかし、常にこの不可知の未来に面して立ち、手をこまねいてその開けるのを待つことなく、この不可知の未来を開いて進まなければならない。そこに人間の避け得ない矛盾がある。私が今久松先生の言葉をここに提示するのは、それが未来への“予言”としての意味を持つからではなく、刻々の今における“戒め”の言葉として深い意義を持つと信じるからにほかならない。

心田を耕そうや

教育学部長 坂井 誠 一

むかし、農耕外道といって、農耕しながら修道していたバラモンが、たまたま大勢の弟子とともに托鉢しながら農道を通っていた釈迦に、「貴方は何故勤勞せずして人々の布施によって生活しているのか」と詰問した。釈迦は「私も毎日耕している」と答えた。「貴方は何を耕しているのか」と更に突込んで詰問すると、釈迦は「私は精進の鋤を持ち、忍耐の牛を飼い、社会大衆の心田を耕し、仏心の種を蒔き、煩惱の雑草を刈り取り、菩提の収穫を得させている。私も毎日耕している」と答えた。（「求道」194号摘要）

この文章は千字足らずの短いもので、しかも6年程前のものであるが、それ以来何故か常に私の心に引っかかっていた。それは、大衆の心田を耕すということはどういうことか、いまひとつ私にはピンとこなかったからである。そこでこの一文を草するに当たり、「心田を耕す」の語の用例が、中国・日本の古典に出ているかを調べてみたが、辞書類による短時間の調べでは用例を見出し得なかった。

これに関連して想起したのは、先年私が在外研究員として東南アジア諸国へ出張し、仏教信仰の民俗調査をした時のことである。タイ国では、男子は一生に一度最低3ヵ月間寺院に入り、僧になるという習慣がある。人口約2千万人のタイ国に、約25万人の僧がいるのはこの故である。僧の生活の中で最も重要なのは、パンサー（phansar 雨安居）とよばれる修行期である。太陰暦の第8月の満月の日の翌日に始まり、第11月の満月の日に終る雨期3ヵ月がこれに当る。この期間、僧は専ら寺院に留って修行に努め、寺院を離れて在家に滞在することは禁止される。

タイ国の僧には227に及ぶ厳重な戒律があるが、パ

ンサーの期間は、寺院内での集団生活を通じてこの戒律を文字通り厳密に実践する絶好の機会と考えられている。経験の深い僧は教義の勉強と祈りと冥想に専念し、経験の浅い僧は、過去における一切の過ちを自責し、古参の僧に懺悔する義務がある。この場合の「古参権」は、年令の高下ではなくして、僧籍にある年数によることは言うまでもない。

釈迦の場合は大衆の心田を耕したが、その教えを受け実践しているタイ国の僧たちは、雨安居の時期に集中的に自からの心田を耕していると解すべきであろう。仏教の信仰心の厚いタイ国の一般大衆は、ワン・プラ（wan pura、仏の日、7～8日に1度、タイの暦にはこの日の所に仏像が描かれている）に、仕事を休んで寺に詣で、この1日間5戒ないし8戒（信仰心の度合いによる）の実践を仏前に誓約する。それは、パーリ一語による僧の首唱に信者が唱和する形で行われるのである。タイ国人の信仰心の厚さには及びもつかない我々であるが、せめて時々自からの心田を耕したいものである。

私は前年度の卒業生を送る言葉の中で、末法末世の現状を慨いたが、それはロッキード事件の論議の最中であつた。それから1年経過したこんにち、事態はますます悪化している。航空機輸入に関わる汚職では、新たにグラマンが登場したのみならず、“現世利益”をめぐる東本願寺の対立抗争は、まさに末法到来を象徴的に示している感がある。

このような“末法濁世”に学園を巣立ちする卒業生の皆さんは、誠に御苦勞であるが、私はただひたすらに、皆さんの御多幸を祈るのみである。

職業意識に人間愛を

経済学部長 植村 元 覚

経済学部の卒業生は、その大部分は直ちに実社会で活動するのでありますが、その社会は国内的にも国際的にも、学生時代に考えていたよりも遙かにきびしい現実の場であります。ことに今日は、国際社会は甚だしく大きく流動していて、それが敏感に国内の諸分野

に影響を与えているように、経済や企業は、その国際化の進んでいる時代です。

諸君が大学で学んだ社会現象を究明する社会科学は、必ずや何らかの形で直接的に或いは間接的にこの現実の理解に役立つことと思われまふ。新たに入りこむ職

場は、社会のほんの小さな一分野であり、巨大なメカニズムのなかの些細な歯車のひとつにすぎないのですが、そこにも社会科学の論理は貫かれているからです。

しかしその職場は、同時にこれからの重要な生活の場であり、人生の場であります。職業を通じて人生観を展開せしめると共にまた人生観を通じて職業意識も育成されます。もともと職業意識あるいは職場における理念については、既にマックス・ウェーバーは「プロテスタンチズムの倫理と資本主義の精神」において節欲と勤勉の徳目をあげています。無駄な贅沢をしないで職業を天職と考えてひたすら努力的に励むこととしています。明治の渋沢栄一も「儒教ソロバン」説を称えて古来の道德律とヨーロッパ的合理的営利主義の統一において新しい経営理念を概念づけ、道德と職業の統合性を強調いたしました。それは今や人間愛さらには人類愛に高められねばならない。

こうして職業意識は深く人間のあるべき姿と結びついていて、人間愛を包摂していました。経済学部の卒業生は、その職場での毎日の生活に人間愛を醸成し、人間的に成長することが期待されます。

次に職業意識は、職場における活動の充実をもくろみますが、それは生命力の充満した青年期に知識欲と

実行力をもって自らにいどみかかります。これは重要なことですが、人間愛あるいは人類愛を無視しては単なるエゴイズムに陥る危険があります。これを媒介にしてより高い次元に醇化してこそその真の意味があると思います。自己の成長への試練であると共に企業や社会の発展の原動力となるものであります。

高校時代は、極言すれば実験室で受験生的動物として飼育され、傾向と対策に人間を型へと押しこめようという傾向があったといえます。それが大学では、自由や真理を探究し、批判的精神を養い、人間の歴史を省みて、自主的に自己の確立を計り、社会の構造や変動の究明を試みたことであろうと思います。諸君の新しい職場においても、新しい問題が次から次へと発生するが、これに対しても本質的に把握し、問題性を明確にして究明してゆく態度こそは、大学卒業生に課せられた課題であると思います。

それには常に足元をみることを忘れないでほしい。そしてグローバルな広い視野から思惟する心がけを、現実の職場の中で深めていってほしいのであります。卒業生諸君の社会人としての第一歩に栄光あれと心から祈ります。

私の卒業アルバム

理学部長 竹内豊三郎

私が札幌の大学の理学部を卒業したのは昭和16年の春で支那事変のたゞなかであった。クラスの誰にも卒業すれば戦地に行かねばならないという意識がかげのようにつきまとっていた。そんなこともあって卒業の一年余り前から卒業アルバムを作ることが計画された。先生方の写真は本職の写真屋に委すことにして、残りをわれわれの写真から選ぶということになりM君がその世話役をひきうけた。

麻の布を張った部厚い大型のアルバムが出来てきて皆を喜ばせたが、これに写真を載せてみると広い余白が目立って素人の作品はどう並び変えてみても冴えなかった。大きすぎたアルバムにケチもついてM君が困った顔になった頃、誰かが余白を恩師の色紙か短冊で飾ればよくなるといった。皆はこの素晴らしい提案に賛成したが、実現するとは思わなかった。翌日M君は色紙と短冊と硯をもって五人の教授の部屋をまわったが結果は予想通りであった。しかしM君は落胆したよ

うにはみえなかった。

一ヶ月ほどしたある朝、M君は得意そうな顔で大学に現れて、ふろしき包みの中から多くさんの色紙と短冊を出して皆の前にひろげた。五人の教授の外に、総長（学長を当時このように呼んだ）と理学部長のものも加わって、7枚セット、15人分がそろっていた。皆があっけにとられている中で、彼はこの偉業を成し遂げたわけをゆっくりと語り始めた。彼が総長の今裕先生を何回もたずねたことがこの成功のポイントであった。当時の学生には総長室を訪ねるということは思いもよらないことで、極めて勇気のいることであった。

今先生は医化学が御専門で細胞への銀反応の研究で学士院賞を受賞され、ヒポクラテス全集の最初の翻訳者としても知られ私達も尊敬していた。先生から戴いた短冊には「明日時至清風自来」と豊かな字体で書かれてあった。理学部長の小熊悍先生は後に国立遺伝研究所を創設され所長にもなられているが、動物の染色

体の研究の大家である。戦後第一回のエッセイスト賞をも受けられており多才の方であった。先生の短冊には「共座白雲中」と書かれてあった。五人の化学科の先生方もめいめいの自作の俳句や詩を書いて下さったが、いずれも先生のすがすがしい心境と深い慈愛とにみちているものであった。これらの色紙や短冊をアルバムに挟んで宝物を抱える気持で私達は下宿に帰った。

大学を出てから四十年の歳月がたって今では7人のうちの二人しか残っておられない。当時の先生方のお年は今の私よりもお若かった。しかし品格と学識の高さには到底およびそうもない。そう思いながら時にアルバムを開けて学生時代を懐古する、色紙や短冊を書いて下さった先生方と、M君の当時のことが鮮明に浮んでくる。

知識の整理

薬学部長 柳田友道

私自身も経験したことだが、ある年頃になると置時計などをバラバラに分解してしまっ、そのあとどうしても元通りに組立てられなくなったりすることがよくある。このように物を壊して組立てようとするという仕草は人にとって本能的なものであると思うが、このような解体と再構成と呼ばれる作業が近代科学の発展過程における一つの研究方法として重要な意義をもったことは、諸君も十分承知していることであろう。この作業は対象が構造物なら解体と再構成と呼ばばよいが、これから問題とする知識のような場合には、分析と総合と呼んだ方が適切かも知れない。

卒業生諸君は本学在学中に広い知識を修得された。薬学という分野は特別に広い知識が要求されるため、諸君の悩みも深刻だったと思う。それだけに私の短い経験からすると、卒業生諸君の脳裡には、あれだけバラエティーに富んだ内容が、コンピューターの部品を一つの箱の中にただぶち込んだように、何の連携もなしにバラバラにおさまっているように思えてならない。バラバラな知識はやがて雲散霧消してしまうに違いない。もったいないことである。

そこでまず広い知識の中から、いくつかの共通項を拾いあげてみてはどうか。これが分析である。ここでいう共通項とは、別の表現をすれば問題意識とでもいうものかも知れない。従って何を共通項として選ぶかは人によって異なってこよう。そこには一人一人の能力や才能、ニード、そして個性さえも反映するであろ

う。それはそれで良いし、またそうでなければ世の中が味気ないものになってしまう。このようにして拾いあげたいいくつかの共通項は、自分なりに整理する必要がある。これが総合である。こうして総合したものをよく見つめると、自分の知識の偏りや欠陥がわかってくる。そこを埋めてゆくのが社会へ出てからの学習の基盤になるべきだと思う。

卒業生諸君は卒業研究に従事してきた。薬学部で卒業研究を課する目的は、個々のテーマをただこなしてもらわなければならない。自分の行った研究を一つの論文にまとめあげること求めている。それは自分の手で得た多くのデータを分析し、それを総合させるための一つの訓練作業なのである。諸君は論文を書きあげたあと、恐らくここが不備だった、あそこはああすればよかったと反省したに違いない。そうだとすれば、われわれ教師の立場からすると大成功だったのである。

卒業生諸君が社会へ出て仕事につく場合、自己選択の効く職場と、その効ない職場とがあろう。若いうちは多くは後者のたぐいの仕事につくことになるだろうがそんな場合に最も恐いのは機械的な盲従とマンネリ化とである。こうなったら全く進歩はない。常日頃自分の仕事の分析と総合とを心懸け、自分にとってその時たとえ自由度はなくとも、今若し自分に仕事をまかせられたらこうするという、自分のものを創造しながら仕事に従事していただきたい。

卒業生に送る

工学部長 室町繁雄

御卒業おめでとう。若さの魅力、あらゆる可能性を秘めた諸君の将来を期待したい。年々人変われども自

然のめぐりは変わらない。厳寒が過ぎれば必ず花開く春が来る。その厳しさに耐えてこそ立派な花が開く。

苦あれば楽あると云う例えの如く、人生も又然りと思う。どうか夢のある人生を送っていたゞきたい。一つの目標に向っての努力、苦しみはやがて楽しい結果が

もたらされるものと信じます。自信を持って一步一步人生の行路を踏みしめていたゞきたい。一言お祝の言葉に代えさせていたゞきます。

◀ ◀ 昭和54年 4 月 1 日付退職者 ▶ ▶

教育学部 教授 山口政則
教育学部 教授 小沢慎一郎
工学部 教授 室町繁雄
工学部 教授 加藤 正
教養部 教授 柿岡時正

教養部 教授 片山龍成
人文・理学部 文部事務官事務長補佐 鍋木隆二
教育学部 文部事務官事務長補佐 民谷順治
附属図書館 文部事務官事務長 泉田利享

今 は 昔

教育学部教授 山 口 政 則

富山に住んでまる三十二年。ふりむいてみると、人の世にこれほど意識の外にあたり意識の中にあたりするものはない、というものがあるとすれば、それは時の流れというものではないかと思う。

あのころも今も、そのままのこの正門を始めてくぐったのは、終戦のあくる年の昭和二十一年九月。その四ヵ月前に、終戦まぎわの空襲で校舎を失った富山師範学校が、廃虚となったこの富山連隊跡に引越してきているというのである。わたしは、この学校に赴任するため、敗戦という混迷のうずまきの中にあって、まるでわずかな明かりを求めようかと思いで、その焦土の上に立った。建物の改築を許さない条件で、軍政部より使用許可があったせいか、焼け残りの建物がそのままわずかに残っていた。正門の左側に倉庫があった。いいようもないむなしさである。右側に月桂樹があった。残暑の中に新鮮ないぶきをしている。倉庫という反逆と冷笑の原型と、月桂樹という忠誠と栄光の原型とが、奇妙に対極をなして向き合っているのである。

わたしは、歴史における「時代」の無意味感を味わいながら、仮校舎になっている旧一中隊の建物にはいつていった。考えてみると、どのように歴史の狂暴な歩みがあっても、そこに生命と創造の源泉が枯れないかぎり、人間社会の崩壊もないし、必ずや新しい形態での教育の営みが生まれるはずである。そのじつ、昭和二十四年には、富山大学がこの地に誕生した。

以来、三十年の歳月が流れた。いろいろな思いのうち、痛恨なのは昭和四十四年の大学紛争。あれは、はたして学生と学校との人間的建設的エネルギーの合流した、よりよきものを創造するための転回点となったであろうか。

英国のある作家が、「くだらない人」を「海の底のタコみたいな人間」といった。自分をふりかえてみると、時の流れの折折に、失敗や不備や錯誤をくりかえしてきた。まるで、海底にはいつくばっているタコみたいなものであったようである。

今、想うこと

教育学部教授 小 沢 慎 一 郎

それは、遠い話である。私が田舎の小学校六年の時だった。中学に進む友達が羨ましく、小学校長であった父に、「自分も行かせて欲しい」とだだをこねた。父は強いことばで「お前は師範学校へ行くんぞ」と許されず、解らないまま高等科に進んだのである。

学校での父、家庭での父、その「姿・像・構……」

から、ぼんやりしたものとはいえ教師としての歩みに気づきはじめた。父につづく兄たち二人が小学校教師であることと、なんだか父の願いや思いがここに在ると思った。なんでもなく普通なことなのだが、私にとっては、大切な教えであると心に刻み、今に生きている。私につづく弟も教師の道を歩み終え、健在である。

少年の頃の勉強は、廊下の片すみを利用して、りんご箱に紙をはった机を並べ、石油ランプをつるしてのものだった。でも、自分で工夫して作った部屋だから、正に楽しい「城」であり、座っているだけで嬉しかった。受験勉強の時など、父がそばにきてくれ、いつも私といっしょの過ごししかただった。父と共に学ぶ幸せを深く味わい、身にしみ、貧しさに耐える育ちだった。

師範学校から音楽学校、そして、母校に教諭として迎えられ「大学人」となる。少しずつ「教育」が解りかけた、やっとの頃の退官である。また、初心にかえり、小学校教育から、一年生入学を始めたい気持ちでい

っぱいである。子供たちに正される自分にまた……。

なにもしない私であったが、大学では随分と教えられ、鍛えられた。学問の在り方の厳しさもさることながら、人の心の醜さをいやというほど知らされた。これからの銘と、心しながら、郷土の発展に役立ちたい。

生涯の研究として、歌う立場からの“美しいことば音の解明”に全力を傾けたい。それは、音韻論・音素論を支えにしながら「話す・語る・歌う」ことに、美しい日本語を育て守る核があると信じるからである。

これからの「本物」といえる人生を全うしたい。冬空にくっきり浮かぶ名残りの柿は真赤である。梢に鳴く小鳥も、ひととき美しい。いやさか、富山大学

定年退官

工学部教授 室 町 繁 雄

あっと云う間に富大での28年が過ぎてしまった。私の人生で一番長い期間を富大で送ったことになる。この間私は唯がむしゃらに研究に熱中して来たように思う。幸い学内外を問わず企業の人も含め多くの協力者に恵まれたことに感謝しています。研究者は各国の同志に先駆けて何かの現象を発見し、これを発表することに誇りを持っていると思う。私の場合タッチの差で遅れをとったことが3回程あったと思う。所詮自分の注意力の不足が原因であることには間違いないのだが。努力のあとの反省が大事のように思われてならない。

私は学生諸君にも、結婚式の祝辞にも努力と云う二字をよく口にしている。低能児でない限り人間の頭脳に違いはないはず、本人の努力如何にかかっていると。

私は非鉄金属材料とくにアルミニウムのテクノロジーを専門にしている。富山に赴任した昭和26年当時は県下のアルミニウム産業は黎明の時であった。高度成長の波に乗ったこともあるが、今やアルミニウム、サッシだけでも3,500億円以上の売上げ、まさに日本一

の生産を誇るようになった。これは私の大きな喜びであり、この急激な成長と相まって私どもの研究活動も又刺激されたことは事実である。

定年制でやがて学園を去らねばならないが末だその実感がわいて来ない。

私はこの10年間学部長として前任者の後を受け、工学部移動問題に取り組んで来た。大学はよりよい環境の中で研究教育の出来ることを念願としている。この理念に対しては何人も異論をはさむ余地はないものと思う。しかし今その結着を見ずして去らねばならないことは残念です。せめて移転の見通しの初光が見出されたことで、自分へのなぐさめとせねばなるまい。この間教職員、学生、卒業生、父兄の皆様の御協力のあったことは何よりの心強さであった。どうか今後とも一層の御支援、御協力の程お願いすると同時に、よりよい富山大学建設発展のため大学の御努力を念願するものであります。

思い出と希望

工学部教授 加 藤 正

私が高岡工専に着任したのは、昭和21年、雪も融けて暖い春の陽光のさす4月でした。それから高岡工専富大工学部に勤務し続けて、33年の月日は夢のように流れ去りました。黒髪の若者はいつしか白髪の老人に化していました。この長い年月の間、富大各部局の皆

様には、公私にわたりなみなみならぬご交誼を賜りました。厚くお礼申し上げます。

高岡工専着任の前は、数年間精密機械の会社の技師を勤めておりました。また、工専、大学における教育研究も精密工学の分野でした。学校卒業以来一貫して

精密工業、精密工学の道を進み得たのは、皆様のご支援のお蔭と存じます。この点に関しましても、深く感謝致します。

さて長い年月のため、思い出は沢山ありますが、いくつか述べましょう。

◇硬い方の思い出

(1) 大学院工学研究科生産機械工学専攻設置に関する思い出

認可のおりる数箇月前、故村中教授と一緒に上京し、4人の審査員を歴訪して、内容説明に当たったことがあります。審査員は機械系の先生方で、いずれも専攻分野における著名な学者でした。その中のお二人は私共と同じく精密工学専攻であり、相互理解の容易だったことは大変幸いでした。ご質問に対して誠意をもって答弁された村中先生のお姿が眼に浮びます。歴訪を終えて痛感したことは、審査員の先生方が、専門分野の大家に止まらず、高潔な人格と卓越した識見の所有者であられたことです。その中の大越諄先生と吉沢武男先生とはその後突然故人となられましたが、惜しまれてなりません。

(2) 評議員時代の思い出

任期中に富山医科薬科大学創設問題が議題に上り、各評議員の意見を求められたことがあります。私は「自分は単科大学の卒業生であるが、多数の学部から成る総合大学の方が教育、研究上適当と思っている。しかし、薬学部の意向、その他の実情を考えると、大局的見地から薬学部が医科薬科大学に移ることに賛成する」という趣旨を発言した。今でもそれでよかったと信じています。富山大学、富山医科薬科大学が共々に発展するよう願

っております。

◇スポーツ関係の思い出

(1) 体育部会委員時代の思い出

大学発足当時工学部選出の委員として参加しました。委員は体育専攻の先生方が圧倒的多数でした。林現学長とはじめてお会いしたのもこの時だったと記憶しています。委員席に座ると、両側に温顔の年輩の先生がおられました。後でわかりましたが、飯原先生と萩野先生で、それぞれ剣道と柔道の高段者とのこと、えらい委員になったものだとして苦笑した思い出があります。しかし、武道やスポーツを好まれる委員方の集まりのためか、さっぱりした気持の良い委員会でした。

(2) 文部省共済組合主催東海北陸地区大学のスポーツ試合に参加した思い出

富大野球チームの一塁手として参加しました。第1回は金沢で行われ、東海地区の名大と北陸地区の富大が優勝戦で対戦し、乱戦の結果20対10で敗れましたが、翌日工学部で質問され、優勝戦で2対1で敗れたと云って笑い話になりました。

思い出話はこれまでとし、話を変えましょう。

停年を前にして、教え子の訪問や便りが急増し、彼等の近況を知りましたが、会社、官庁、研究教育機関など勤務先のいかにかわからず、すくすくと伸びている様子です。教育者としてこの上ない喜びを感じています。

最後に、教職員の皆様が、スポーツマンシップを重んじながらご活躍になり、富山大学が、曇、雨、雪の月の多い北陸の天候とは逆に、一層明るい大学として発展することを希望して擱筆します。

退任に際して

教養部教授 柿岡時正

富山大学での多年の哲学教師生活も間もなく終りとなるが、まだ他人事のような気がして一向に実感が生じて来ない。その理由は色々あるが、根本的には定年までも生き延びるなどということは自分でも殆んど予想していなかったからであろう。何しろ両親の強い反対を押し切って、昭和十年に大学の法学部から文学部哲学科へ転学した時には、これ程永く生きられるとは思ってもいなかった。その頃は大战前夜の暗い時代で

経済的にも深刻な不況期だったから、戦争で死ななければ陋巷で窮死することも覚悟していた。それが今まで生きて教壇から所信を述べ続けて来られたことは、満足というよりもむしろ不思議なのである。

学問的研究に関しては、そのような緊迫した時代に一日も早く世界観としての哲学を確立しなければならなかったもので、卒業論文にも「カントよりドイツ観念論を経てマルクスに至る過程を考察し、併せて西田哲

学を論ずる」というような大構想を予定していた。ところが実際に提出したのは「カントの自由論に関する一考察」だけであり、しかも全体は今でもまだ完成していないのだから誠にお恥ずかしい次第である。退職後にはこのテーマを人生の最終的卒業論文として書き上げるために、更に他の方面（必ずしも哲学だけでなく）にも眼を向けたいが、既に日暮れて道遠しの感が強い。しかし若くて頭の新鮮な時期に設定したこの基本的構想は今でも正しいと思っているので、それを終生追い続けることはある意味では幸福といえるかも知れない。

以上は個人的・私的な感想であるが、もとより公的な思い出も数多く、その中でも特に印象深いのは大学発足とあの激烈な紛争の頃である。新制大学の設立は戦前における高等教育機関の種差・格差の撤廃として、教育の普及化・民主化を志向する戦後の学制改革の頂点であった。したがってこの新制大学の将来に多大の期待を持ったのは、旧制大学や古くからの文部行政に失望していた私だけではなかったであろう。私は学生時代に旧制帝大の学部・学科を転々としたり、卒業後は文部省の大学教育課に在籍して行政の実態を体験すると共に、私立学校にも出講しながら常に理想の大学像を探し求めてきた。しかしその結果として知り得たことは、旧制大学（国立・私立共に）が必ずしも純粋な真理探究の場ではあり得ず、中央集権的な官僚統制の

下におかれており、そのために無責任な戦争への暴進の抑止力にもなり得なかったという事実である。

その意味において、新制大学は旧制大学の欠点を批判・克服すべき新しい大学像であったともいうことができよう。もとより大学である以上学問的真理の探究が第一目的であることは共通しているから、それは当然引き継がれるべきであるが、新制大学の基調はあくまでも自由で民主的な学風でなければならないのである。しかしながらそのような立場は、戦前から生き残った統制的官僚や権威主義的な古い型の教授、あるいは新しい大学教官の地位に満足して、旧制大学の亜流や下風にも甘んじる人達には喜ばれる筈がないのであろう。したがって官僚統制や権威主義も必死に巻き返して来たのであり、それに対する抵抗があつた大学紛争となって爆発（もとより直接の原因は種々異っていたが）したのではないだろうか。しかもその結果は一応権力側の圧伏が成功したようにも見えるが、最後の帰趨はまだ分らないというよりもむしろ明白であるかも知れない。

さてこのような感懐を抱きながら、私は約三十年間の富山生活を終るが、今後は私にとっての故郷である東京の郊外にでも閑居して、自由な研究に専念したいと考えている。したがって富山大学に関する限り、現在は「老兵は死なず、ただ消え行くのみ」という言葉にも似た心境であるといえよう。

回 想

教養部教授 片 山 龍 成

富山大学文理学部に就職が決ったのは昭和32年9月のことであつた。ただちに富山を訪れ挨拶や宿の決定を済ませてから、いったん千葉に引き上げた。諸々の準備を整えて再び富山に向けて金沢行の急行白山に乗ったのは10月4日であつた。ちょうど世界で初の人工衛星スプートニク1号打ち上げ成功の日であつた。長い療養生活のあとただただに、私は期待と不安の入りまじった複雑な気持で富山に着任したのであつた。

それからいろいろなことがあつた。特に文理学部の変遷は著しかった。まず、学部からの教養部の独立と理学科の充実。つぎに、人文学部と理学部への発展的解消があり、今日の姿となつた。

第一次の改組、つまり教養部の独立の際には、私も立場上否応なく立ち合わされた。といつても、ただ静

観し、流れに追随しただけのことであつたが、それなりに感慨はあつた。幾多のシーンが心に焼きつけられた。そして何より身心の疲れが残つた。

教養部独立とともに私は同部に移つた。教養の授業に理学科への御手伝いが重なり、大変だつた。そんなところへ、やがて大学紛争。始めの頃、改革論議に参加させて貰つたこともあつたが、正直なところただ静かに見守るだけだつた。これについて種々の意見や分析を聞いたり、読んだりしたが、わからないことが多かつた。ただ、大学立法は忘れてならないことだと思ふ。

在職21年余り、あまり見るべき成果もなかつた私だが、文理時代に私の研究室を巣立って行つた多くの卒業生のことを思うと心楽しい。皆立派に活躍している。彼等の発展は私の喜びである。

退職に際して思うこと

人文学部・理学部事務長補佐 鏑 木 隆 二

10年一昔といいますが、早いものでもう10年前になった昭和43年11月12日の朝、出勤の途中、荒町バス停で本学職員のIさんに出遭った。その時Iさんの口から一言「本部がやられたね」という言葉を耳にしたが私には何が「やられた」のか言葉の意味が理解できなかった。しかし、大学前でバスを降り正門から本部前に来て、始めてIさんの言葉の意味が判った。

本部の建物が、一部過激派学生に占拠され、2階の窓には赤旗が掲げられ玄関の扉が固く閉ざされ、内部には事務机や椅子を乱雑に積み上げて「バリケート」が築かれていたのである。

本学の大学紛争もこの日から、このような学生の無法な直接行動によって日を追ってエスカレートし、「教育的配慮」とか言われた決断のない優柔不断の対応の結果が、筆舌にも表わし難い苦痛と困惑、そして屈辱的な隠忍を強いられた連日の不自由な執務など、われわれ事務職員が被った心身ともに甚大な苦労も計りしれない程であったことを、今も忌むらしい回想として脳裡に残っている。

人生も齢（よわい）61年ともなれば、いろいろ懐しい思い出や追憶があり、また、思い出すのも嫌な回想回顧があります。

今さら「わが青春に悔あり」という気持もありませんが、われわれ大正6年生れは、支那事変が勃発した昭和12年が20才の徴兵検査に当り、そして翌13年には金沢の輜重兵（しちょうへい）第9連隊に入隊し、学生の皆さんと同じ年頃に当る21才から23才までの青年時代を、毎日が厳しく辛い5ヶ月間の新兵教育を経て、中支（中国華中地方）での生命の危険にさらされた2年間の野戦生活を過しましたが、昨年不再戦の誓いも固く日中友好条約が結ばれ中国との国交が回復したことは、嘗て中国との戦いに参加した一兵士として、ひとしお感慨深いものがあります。

その40年前の軍隊生活で培われた戦友との特別な友情関係は、今も1年に1回、青春時代に還えられる懐しく楽しい思い出を語り合う集いとして続けられています。

大学にお世話になって27年有余、思えば永い歳月でしたが、この間、諸先生、諸先輩同僚の皆さんの温かいご指導ご援助によって、なんとか今日まで勤めさせてもらったことを、心から有難いことだと感謝しております。

今、在りし日のことなどを偲び、深い感慨を抱いて職場から消えてゆきます。どうも有難うございました。

思 い 出

教育学部事務長補佐 民 谷 順 治

昭和23年秋、私は富山師範学校の事務員として採用されました。当時の学校は、五福構内の戦災で残った旧軍隊の建物を利用し、そうして空地も相当あったものだった。現在、大学の発展とともに各部局の鉄筋コンクリートの建物が立ち並び、自動車が構内に一杯に駐車することなどは、当時、予想もできないことであった。また、採用時の学校の事務室は、旧将校集会所の建物を改装したもので、現在の職員ホールの中にあつた。そうして、復員して間もない私は、そこに勤務したのであるが、そこで富山市の空襲を経験した方からその惨事をきいて、内地における戦争の被害の恐ろしさを改めて知ったわけです。

翌年、新制大学が発足し、私は、事務局に転出し、

以後、教育学部、薬学部、事務局の順に職場が移り、いま教育学部で停年となりました。

その間、何の為すこともなく、そうして公私ともにご迷惑をお掛けしましたが、そのつど懇切にご指導くださいましたことを、ここに厚くお礼申し上げます。約30年を振り返ってみると、大学紛争は特に忘れることのできない出来事でありました。この解決に長い期間がかかりました。関係者の方の御苦勞は、大変だったことでしょう。私にとっても、よき体験となりました。

今後とも教職員の皆様、学生諸君の協力により、富山大学の発展と、皆様方の御健康を心からお祈りします。

退職に当って

附属図書館事務長 泉 田 利 享

私が富山大学に御縁をいただいたのが、開学して間もない昭和24年9月15日、当時まだ本部が奥田の薬学部校舎の2階に間借りしていた頃の学生部に奉職させていただいたのが、そのはじまりであります。

爾来約30年、この間には辛かったこと、楽しかったこと、あるときは進退伺を懐にしたこと、またあるときは事が成り、仲間とともに酒を飲みプロ冥利に酔うたことなど、今はこれらのすべてが懐かしい思い出として脳裏を去来して尽きません。長かったようでもあり、また短かかったような30年ではありましたが、今日の富山大学の現況を看、当時を顧みるとき隔世の感があり、歳月の重みを感じずにはおれません。

学生部から庶務課に移り、昭和33年6月23日はじめて事務長として薬学部へでることとなりました。薬学部では、学生の赤谷山遭難死事故、三八豪雪との闘い研究科（修士課程）及び研究施設の新設、五福移転、75周年記念事業、大学紛争等々、波瀾と起伏にみちた

12年を過し、6年間の工学部での努めを経て、51年4月から附属図書館に移ったのですが、薬学関係図書富山医科薬科大学への管理換の業務が、私の在職中最後の仕事となり、薬学部とともに、本年度限りで富山大学からその姿を消すことになりましたことは、薬学部とのかかわりで何だか因縁めいたものを感じさせられます。

永年地元の反対に阻まれ、膠着状態に陥っていた工学部の五福移転問題も漸く明るい兆しが見え始めたことは、まことに喜ばしいことであり、一日も早い移転の実現を祈ってやみません。

何はともあれ、この30年、よき上司、よき同僚に恵まれ、諸先生方の温い御理解と御同情に支えられ、健康で無事定年を迎えることができますことは、私にとり何よりの幸せ、何よりの喜びと感謝いたしております。

富山大学の今後益々の充実発展と、皆様方の御健康と御昌運を心からお祈りいたします。

再びドイツへ

教育学部教授 大 塚 恵 一

昭和42年（1967）度文部省在外研究員として、西ドイツのテュービンゲン大学のO.F.ボルノー（Otto Friedrich Bollnow）教授（哲学・教育学）のもとに一年間留学したのが縁になって、その後同教授の来日を機に2回にわたって本学・本県に招いて講演をお願いしたり、西ドイツのロイトリンゲン教育大学教授（哲学・教育学）でボルノー教授の高弟もンメル（F. Kiimmel）博士（当時、京都大学客員教授）や同大学教授（音楽学）シュティーフェル（E. Stiefel）博士の来訪、講演の機会を得ることができた。また、ロイトリンゲン教育大学には本学部の学生がすでに5人、文部省の奨学金を得て10ヵ月ずつ留学しているのも一連の出来事といえよう。このようななかで、このたび恩師ボルノー教授の提案に基づくDAAD（Deutscher Akademischer Austauschdienst ドイツ学術交流事業団）の招へいで交換教授（非公募、専門領域を問わず毎年3人）として昨年の9月から12月までの3ヵ月間、再渡滞独（主としてテュービンゲンとロイトリン

ゲン）の機会に恵まれた。「招へい」という事実は、私に自分のメニューによって食事することを全くと言ってよいほど許さず、上記シュティーフェル教授ならびに同じ大学の旧友F.マウラー（F. Maurer）教授のフランクフルト空港までの出迎えをはじめとして、すべて提供されるメニューに従って暮さざるをえない3ヵ月となった。講義、演習、研究会への招待。会合、食事、小旅行への招待。ロイトリンゲン教育大学新学長の就任式および祝賀会への招待。はては、私としては何とか勘弁してほしかったドイツ語による講演会の設定（計5回）等々。これらによる多忙さは、私の当初メニューにあったドイツ外への旅行計画のすべてを不可能にし、あげくはハンブルグ空港よりの帰国予定を、より近いフランクフルト空港発に切替え、そのフランクフルトへも帰国当日の早朝空路で出ること余儀なくさせた。

帰国後、ボルノー教授および友人マウラー氏より切り抜きが送られてきてはじめて知ったのであるが、驚

いたことにテュービンゲン、ロイトリンゲン両市の新聞で、私の滞在3ヵ月のことが報道された（昨年12月6日付、8日付）。それぞれの記事の見出しに、たいへん好意的な副題がつけられていて、恐縮するばかりである。

現今、西ドイツではいわゆる客員教授などすべてD A A Dをとおすことになっているので、私としては今回の招へいは実に身に余るものと言わなくてはならな

い。歓迎せめのメニューによる3ヵ月の食事をさっすぐに消化するには私の胃袋は弱小すぎるようである。たとえ健全強大であっても、ご馳走になったものを消化吸収するには、時間をかけなくてはならない。次々に届いてくる該地からの自分の手で梱包した小包を前にいささかたじろぎながら、以上とりあえず帰国のご挨拶とします。

西ドイツの一行を迎えて

工学部教授 養 田 実

昨年の晩秋、ドイツ美術鑄物協会の一行が来日した。これは前年我々が日本鑄物協会関係として欧州視察旅行をした際、ドイツ滞在中の計画を作成してくれ、同じホテルに泊りバスや飛行機に同乗して訪問先を案内してくれたその交換として来日したものである。日本での計画を委嘱されたので、東京や京都の知人に頼んで訪問先の日程を作成して送ってやった。主として各地の代表的美術鑄物工場と美術館や博物館などを組込んで、可能な限り同行案内をするように努めた。一行は東京で4泊、高岡で2泊そして京都、大阪で各3泊した後、台湾、香港経由で帰国した。団長の協会長シュトラース・アッカーさん、先年案内してくれた協会の専務バッハさん、ベルメーカーのリンカーさんなど皆前年の欧州旅行で顔馴染みになった人達である。その他昭和36年ウィーンの国際鑄物会議で知り合って以来今日まで、17年間も文通が続いていた旧友ドイツの大製鉄会社アウグスト・ティッセンの常務チーガーさんなど一行12名、そのうち夫婦連れ3組。皆バスの中でも賑やかによく話合っていた。これらの話題や帰国してから送ってくれた見学記などを参照しながら、断片的ではあるがかれらの印象を拾ってみることにしたい。

一行は日本が古い価値ある伝統文化を持っていて、しかもその中に近代生活がうまく同居し調和していることに感心していた。そして工業生産の高いことにも驚いていた。ところで先ず街の印象としては、東京がコンクリートの塊りだと言ってびっくりしていた。それだけに井の頭公園の西望美術館を案内したときは、本当に心から喜んだ様子だった。広場に噴水の無いことも強く感じたようだ。上野公園下の噴水を見たときには「あった！あった！」と喜んでいて。欧州では到る所の街角に噴水があり銅像がある。車の渋滞にも呆

れたようで、ホテルの窓から眺めていたら20分間も同じ車が下にいたと云って大きな話題にしていた。それでも日本人は根気よくそれを待ち、互いに規律正しくさばいていると云って感心していた。東京では高輪プリンスホテルに泊っていたが、コーヒーがまずいと云って閉口していた。アメリカ流で味が薄いと云っていた。靴を脱ぐことも重大な事柄で、今夜のパーティは靴を脱ぐのかと真剣に尋ねたりして、当惑していたようであった。ポケットから靴ペラを出して渡しても使い方を知らぬようで、苦心の末脱いでもそのまゝ素足で靴の横に立ってしまう始末だった。案内した所で時折抹茶をサービスしてくれたが、これが結構苦痛だったらしい。「寺院や個人宅で特別高級で厳粛なお茶の接待を夥しい程うけて坐らされたり、無闇に靴を脱がされたり、食事には努力して箸を使ったりしたが、それでも皆非常に快適だった。刺身もうまいものだと分った。そして家にはベッドも椅子も殆ど無いが、この生活様式の中に経済性と更には高度の生産力の基本も多分あるのだろうと感想を綴っている。しかし各所で出された抹茶の味の良しあしはかなり分っていたようであった。日本人は勤勉で控え目な態度であるが、しっかりしていて非常に技術的知能と進歩的な考えを持っているとも評している。日本で言う焼型製造法は欧州には無いので、各所で丹念に見学していた。だが工場の作業員や学校の生徒が同じ制服を着て一様に鉄兜をかぶっているのを奇異に感じたようで、「過度の個人主義の自分達の所ではどこにも見られない光景だ。」と書いている。さらに「工場の構成員が夫々秩序をもって配列されていることは、我々西欧では個人の人格を強調する個人主義の社会だから殆ど想像できない程だ。グループで働きグループで生活するとき、そのグ

ループへの忠誠の義務を負うために個人の要求は抑圧され、批判は控え目になっている。子供の頃から他人に敬意を表し、憎むべき相手にもやはりそうするように教えられている。それでいて15年前に起こった学生紛争のようなものも持ち合わせているのだ』という事も記している。さらにホテルの暖房は熱すぎる。夜の照明にしても一体エネルギー問題をどう考えているのかと文句をつけていた。日本は資源が無いのに原料の貯蔵は僅かしかない。鉄鉱、銅、石炭、石油、ガス、ゴムなど皆輸入に依存しているのにどうするつもりかなどと書いている。それでも日本人がまじめに良く働

くことは感心していた。「日本人はアジアのプロイセン人であり、ドイツ人はヨーロッパの日本人である。」というのがチーガーさんの総合所見であった。美しい富士も眺め各地の紅葉も見事であった。ドイツには「天使が旅行すると太陽が微笑む」という諺がある。日本滞在中好天に恵まれ快適な旅行を楽しむことが出来たのは「我々の心がけが良いからだ」と話合って喜んでいた。尚通信やメッセージなどにドイツ語関係の先生を煩わしお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

訪 欧 記

経済学部助教授 武 井 勲

77年夏季休暇を利用して英瑞独に遊び、米国をまわってきたときのこと。アンカレッジを経由してヒースロー空港へ。入国手続のロビーは閑静なことと、アラブやアフリカの人々の多いことに日米とは少し異なる印象を受けた。ヴィクトリア・ステーションに歩いて行けるホテルに投宿。ロンドンは建物も人々の服装も新しくないものと歴史に裏打ちされた国際色のもつ落着きがある。涼しい夏であった。

ホテルの食事は一人旅では味気ないので、できるだけ街の中へ出掛ける。サンドイッチ屋さんは気軽に入れ、もっとも手頃な食事場所の一つ。サンドイッチの多様性とその味の良さに本場の権威を見る。あてどもなく歩く、というのが旅における私の趣味というよりはむしろ癖で、折角行くのだからある程度の予備知識を仕入れてから歩けばなどご親切な助言を仰ぐことしばしばだが一向に直らない。気の向いた方向へ行き、立止って眺め、公園、書店、美術館、骨董品、輸入品、ファッションの店など好き勝手に入ったり出たりする。

英京ロンドンも断片的な知識しかないまま、例によって歩く。道は曲折が多く、交通信号もあるかないか分からないような感じ——日本のと少し違うので。それでも人も車も流れている。衝突はあまり見当たらない。立派な並木道の突き当たりに、長帽赤服にサーベルをつけた衛兵が威儀を正して演技(?)している。さてはひょっとしてバッキンガム宮殿かと門衛に鉄柵越しにきく。それから、セント・ジェームズ・パークに入ると行きずりの英人の観光客らしい人が私に道を聞いた。その宮殿を今バッキンガムかと質問したばか

りだというと、「ザット・イズ・ベリー・グッド」と言った。

2時間余りも歩いてロンドン塔へぶっかる。ヨーマン(ビーフ・イーター)の説明を聞く。サー・ウォルター・ローリーの話、幽囚と虐殺の歴史が見事な雄弁で聞かされる。演劇好きの国民性か。多くの不吉の兆というレーヴン(わたりががす)の居る側に、1,000日のアンの刑死した椅子がある。血の香が匂いくるようであった。

予約をしていなかったためホテルを追い出され、他を当たるがない。500万人の観光客がこの夏ロンドンに買い物に来たという。円高ドル安ポンドの更に安。仕方なく旧知の保険ブローカー、ハリー・ゴート氏の家に10日程寄宿。長距離ランナーの孤独の舞台にもなったロンドン郊外のサレイにあるドーキングという小さな町であった。シティーまで車で90分の所。この間日課のように通う。ウィンブルドンも途中にあった。6才から9才の頃よく遊んだスティーブンはハイ・スクールを了える夏休み。彼のアティック(屋根裏部屋)に居候をする。夫婦と男女各1人に母方のおばあさんの5人家族。スティーブンには日本流の入試はない。エスタブリッシュメントへ行くか、比較的新しい実のある大学へ行くかが選択らしい。ランド・マネジメントの勉強をしたいという。内容は分からないままに彼の生活ぶりを観察する。一番大変なクラスはリーディングだという。古典を読み、その批評や感想を提出する授業のようである。日本の英文科の学生が読まされるようなシェイクスピア、ディッケンズ、ヘンリ・ジ

ームス、モームなど毎日5時間位は読んでいます。読書好きの父親とはよく夕食後に議論をしている。父と子の間にも紳士協約があるのだろうか。言葉の使い方、マナー、論理の展開など、なるほどと思われる

教育がこの家庭にはあった。イギリスに居て、妙に“レット・ミー・ツィンク・アバウト・イット”ということばが“サンキュー・ベリー・マッチ・インディード”と共に印象に刻明されている。(1979:2.20)

「教員養成課程合宿研修」の成果

実行委員 西野 勉(教育学部4年)

昭和53年1月、国立能登青年の家で実施された合宿研修(教育実習反省会)はとても有意義でした。これまで、あれほど数多くの学生が参加して行われた学部行事は、合宿研修以外になかったように思います。

“学生の共同生活による相互啓発と連帯感の育成を図るとともに、豊かな人間性の形成に寄与し、資質のすぐれた教員の確保”という目的は十分に達成されたと思えます。

教育実習というものを3年次の10月に初めて経験したわけですが、教師の仕事というものについてよく知らなかったわたしにとり、それは楽しくもあり、また苦しいものでもありました。ときにはすっかり自信をなくしてしまい、自分にとって教師という仕事が、とても縁遠いものに思えてならなかったことさえありました。そんなわたしが、この合宿研修に参加して、ほとんどの人が自分と同じように苦しんでいることを知

り、内心ほっとしました。と同時に、多くの人の発言の中に、これからは精一杯努力していこうという意気込みが感じられ、これまでの自分の努力のなさを痛感したしだいです。そのとき、もっと自分自身を鍛えなければいけないと、自分にいいきかせました。実習中の先生方の指導よりは、むしろ、このときの学友たちの発言の方が、わたしにとっては、強く心にひびいたようです。

ともに教育学部で学んでいながら、そのほとんどの人とは、講義で顔をあわせるだけになってしまいがちななかで、わずか1泊2日の短い日程でしたが、多くの人とともに行動し、ともに語り合い、彼らの教育に対する熱意を感じ、自分の反省材料と成り得たということは意味深いものであったと感じています。願わくば、今後このような機会がもっと数多くもたれることを期待します。

■■■■■■■■■■ 昭和53年度「教員養成課程合宿研修」報告 ■■■■■■■■■■

————— 実行委員(教育学部3年) —————

10月23日から、24日にかけて、教育学部行事として、教育実習反省会合宿が実施された。学生約220名、教官、事務官を交え、バス5台で、紅葉の美しい東砺波郡上平村合掌の里へと向った。

第1日目は、上平小学校、中学校の授業参観で始まった。両校の校長先生から、上平の地域性と地域性に基づいた児童の特徴、そして教師として必要な条件、どういう先生が望まれているかについて、中川富山県教育委員長からは、教育における伝統継承の重要さと、教育に対する信念を各々が持つことを私達教育学部生に托されたように思う。

2日目は、5つの合掌の家に分れて、教育実習の反省を通じての今後の課題の討論に終始した。担当学年別に小学校低学年(分科会I)中学年(II)高学年(III)中学校(IV)幼稚園(V)に分かれ、それぞれのテーマに基づいて進められた。分科会(I)(II)(III)では、体

育、国語、音楽、図工、理科などの授業の実践例を通して、子供の掌握のしかた、見方、接し方、動かし方、発問のしかたと助言、資料、掲示、板書のしかた、授業中の評価について話し合われた。分科会(IV)では、附属中における課題学習の体験を通じて、課題の与え方、中学生の問題点について、分科会(V)では、教材と活動のさせ方、子供の見方と接し方を中心に話し合われた。反省会には附属、堀川両校の先生方にも参加していただき、来年の教育実習に向けて助言は、何らかの形で私達の心に残ったと思う。

そのほか、行徳寺住職から、浄土真宗の真随を極めようと人力を尽した行徳寺開祖道宗の話や、2日目の夜には、満天の星のもとで、各科、工夫を凝らした出し物でキャンプファイヤーの楽しい一時を過ごした。

こうして2泊3日の合宿研修は無事に終わった。

学部だより

●教育学部長の改選

現坂井誠一教育学部長の任期満了に伴い2月21日に学部教授会で選挙の結果、大沢欽治教授を次期教育学部長に選出した。

同教授は、昭和18年9月東京音楽学校甲種師範科を卒業され富山第二高等女学校教諭などを経て、同26年3月富山大学教育学部講師、同37年7月助教授、同52年4月教授となった。

昭和53年4月1日から教育学部附属幼稚園長を併任現在に至っている。

大沢教授の専門は器楽で富山県の出身である。

なお任期は3月31日から2年間である。

●経済学部だより

いささか旧聞になって恐縮だが、任期満了に伴う学部長選挙が昨年8月25日に行われ、植村元覚教授が新学部長に選出され、9月30日から就任した。任期は2年間である。

学生部だより

●「白銀を求めて」スキー講習会終了

本学恒例のスキー講習会は、去る1月7日から12日まで志賀高原ブナ平スキー場を中心として行われた、日程が例年より1日短いこと、また、例年になく積雪が少ないことが心掛りであったが、指導教官また受講生の諸君はそれを見事に克服して、より充実した講習会となり心技両面に多大の成果をおさめ終了し得たことを、ここにあらためて関係各位に感謝いたします。

●スキー講習会に参加して

雪花が舞う……。私達の六日間の青春の軌跡が刻み込まれた山々を労るかのよう……。一月七日、初めてきらめく雪面と出会った時のあの感動と翌日からの講習の一瞬一瞬が今鮮かに胸いっぱい蘇ってくる。

女である私にとって急な谷を滑り降りるという事は不気味な奈落の底へ引きずり込まれるような錯覚を起こし、その恐怖感に囚われるともう前をしっかりと見つめることができなくなり、つい後ずさりしてしまう

のです。でも、班の先生を信頼し仲間と励まし合うと雪山は私を優しく見つめ返してくれました。素直になって皆と心を合わせて同じシユプールを描いているといつの間にか恐怖感は消えて風も雪も優しく語り始め私は自然の中に溶け込んで雪の精のように透明で汚れないものになるような気がするのです。

もちろん技術の拙い私ゆえ、何度も後継者への警報の悲鳴を派手に木間に響かせ、すぐ後には雪煙りと共に地震を起こしましたし、藪の中に突込んで皆の爆笑を買いもしました。でも、それは私が一生懸命やった結果ですので何と誇られてもいじけず堂々としていたのです。(実際班においてこんな女子の存在は実に貴重なのです)そして雪明りに守られて清広荘に無事?到着すると声高らかにシーハイルと叫んだのです。私はここでの団体生活を通して、つい利己主義で怠惰な生活を送りがちな自分を見つめ直し、他者への思いやりと協力、自分の責任そして規律というような人間社会における常識でありながら、日常は忘れがちなものの重要性を再認識しました。そして講習会で得た友情を大学に帰っても大切にすると山々に約束したのです。

最後に大変お世話になった教官並びに学生課の方々又、体育会の人達に紙上を借りてお礼申し上げます。

教育学部 水田 颯代(7班)

●昭和53年度体育系サークルリーダー研修会終了

本年は澄み切った秋空の下眼前に峻巖剣岳を仰ぐ、上市町伊折の里、剣青少年研修センターを会場として実施され、実に熱心に進行され、最後に早月川原における応援練習で研修生の意気を鼓舞し終了した。

◇実施概要

期 日 昭和53年11月25日(土) 26日(日)

場 所 富山県中新川郡上市町伊折

剣青少年研修センター

研修生 体育会役員及び運動部リーダーの学生90名

講 師 学生部長 岩淵富治

教養部 教授 稲垣保彦

” 助教授 福田明夫

教育学部 講師 山下三郎

研究項目(主題)

1. リーダーシップについて
2. クラブ活動と体育会

講演

- I 人生とスポーツ（経済学部助教授 武井 勲）
- II 人間とスポーツ（教養部 教授 稲垣保彦）

●授業料の免除及び徴収猶予について

前期の授業料は4月中に、後期の授業料は10月中に納付することが、富山大学学則第31条に示されていますが、経済的理由によって授業料の納付が困難である場合、又は授業料の各期ごとの納期前6月以内（新入学者に対する入学した日の属する期分の免除に係る場合は、入学前1年以内）において、学資を主として負担している者が死亡し、あるいは学生若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けた場合、その他これらに準ずる場合に授業料の納付が困難な場合は、授業料の免除、授業料の徴収猶予並びに授業料の分納について申請することにより、選考の上、許可されることがあります。

希望者は各学部・教養部の掲示に注意し、不明な点はそれぞれの学務係に問い合わせて下さい。

●学生健康保険組合の一部改正について

昨年11月11日に開催された本学学生健康保険組合の理事会において、本規約の一部が改正され、年間を通じて組合員1人に支払う医療費の最高額を「25,000円」から「30,000円」に、及び組合員が死亡した場合の弔慰金「5,000円」を「10,000円」にそれぞれ上げられ、昭和54年4月1日から支給されることになった。

これは近年医療費の高騰及び医療費請求書の証明手数料が上げられたため、個人負担の軽減をはかるものです。

●学生証の査証について

1, 2, 3年次生は、各学部、教養部の学務係で、昭和54年度の査証を行ないますので必ず受けて下さい。

なお、査証を受けていない学生証は無効となります。

